

今年も新入りがやってきた。

どいつもこいつも……暗い目をしていやがる。

まあ、ここは刑務所以下の地獄、

いや天国に一番近い場所と言った方が適當か……

西暦2100年、奴らは天から降ってきた。

神々しく、天使のように涼やかで、仏のように慈悲に満ち満ちている

このくだらない現世から魂を開放し、涅槃へと導く存在『アスラ』

全人類を幸せにする為、人類を殲滅しようとしている狂った連中。

このアスラとの戦いで人類は半減した。

追い詰められた人類はアスラの体から未知のテクノロジーを入手、

アスラの首を狩る為の超兵器を作り出す。

「天罰機」と呼ばれたその機体はパイロットの脳と情報を

リンクさせる事により、簡単な基礎訓練だけでアスラと

戦う事が可能であった。

そこで頭のキレる連中は狂ったアイデアを思い付いた。

全ての人間が15歳の春、クラスの中から一人を多数決で決める。

選ばれた一人は『クシャトリア』と呼ばれ、天罰機に乗りアスラと戦う。

選んだ方は『ヴァイシャ』と呼ばれ、自分たちが選んだクシャトリアの戦闘、生活、死の瞬間をダイジェストで見せられる。

これにより、責任感ある人間が生まれる……と、

かつて一人の生贄を選択し、生き残った大人達は信じている。

優秀なパイロットを育成し、失い続ける事なく戦闘を続けられるシステム。

つまり優秀な人物を残し生産性の低い人材を排除する為のシステム。

俺も2年前に選ばれ、アスラとの戦闘に明け暮れている。

同期の仲間も1割くらいしか残っていない……皆、アスラに殺されたか、自

ら命を絶った。

一部人間辞めた奴らもいたな……

天罰機に乗れるのは15歳の春から18歳の春までだ。

なんでも3年生き残れば巨万の富と世界を牛耳る地位が与えられ、

一生楽しく暮らせるらしい。

まあ、ここから『卒業』した奴は見た事が無いが……

俺を選んだ奴ら……暗く意思の無い瞳、

安堵の表情を浮かべる奴、大喜びする奴、

上辺だけの同情の言葉を口にする奴……

あと1年か……長いな……

見せつけてやろう、巨万の富と絶対的な地位を得る瞬間を……

隣に誰かが立っている、気配はまったくしなかった。

セラ「明弘（あきひろ）：午後から新しいメンバー来ます。」

俺は思わず舌打ちをした。

美しいツラ、均整の取れたエロボディ、思いやりのある優しい性格。

俺はコイツがベドが出るほど嫌いだ。

こいつらはドウルガー

天罰機で戦う俺たちクシャトリアをサポートし、

主に索敵を行う戦闘用アンドロイド。

天罰機を含め、こいつらも個別に名前がつけられてる、こいつは「セラ」

俺たちのチーム専用のドウルガーだ。

二年間共に戦ったが、俺はこいつが今だに苦手だ。

セラ「このチームに一人新人が来るらしいですよ」

明弘「美少女か？」

セラ「いえ、男の子だそうですよ」

明弘「なんだ、つまんねえな。」

咲夜「美少女はもう間に合ってるから必要ないでしょ？」

咲夜「で？イケメン？？身長高い？？？」

セラ「身長152cm、イケメンという言葉は随分と古い表現ですね？」

咲夜「なんだチビか……つまんねー」

こいつは咲夜（さくや）、俺たちのチームの一員だ。

まあチームと言っても他の連中は全員死んだんで、

半年ほど二人で戦っている。

しかし半年も増員無しでよく生き残ったもんだな……

明弘「しかし、まあ……一応歓迎会でもしてやるか」

咲夜「私、パス」

セラ「コミュニケーションを取っておいた方が絶対いいですよ」

咲夜「あんまり仲良くなりすぎると死んだときダメージ多いからパス」

セラ「……………」

セラはアンドロイドのくせに今にも泣き出しそうな悲しげな表情を浮かべる
俺はコイツのこういう処が大嫌いだ。

咲夜「解った、わーかつーたー、私も行く、

だからそんな顔しないでっセラ」

セラ「咲夜……………」
セラは本当にうれしそうな表情で答えた。
何度も言うが俺はコイツのこういう所が大嫌いだ。

2.

12 西暦3276年

私は灯火（あかり）
天空神社の巫女。

桜（さくら）「ねえ、灯火…………もう少しゆっくり歩いて…………」
今日は親友の桜と我が神社に伝わる秘密の祭具殿を探検中だ。

灯火「本当に迷路みたいね」

桜「ねえ、もう引き返さない？」

灯火「もう少しで着くから、もう桜ちよつと離れてよ。歩きにくい」

桜「だって怖いんだもん」

灯火「一応、ここも神域。だからお化けとか出ないから安心しなさい。」

桜「お化けは出なくても、幽霊とか…………」

灯火「それ、おんなじでしょ？」

灯火「桜だって巫女なんだから……バイトだけど……」

桜「バイト、バイト！正社員と同じ仕事はおかしいと思いますよ灯火！」

灯火「あつ、ここだ……この扉……」

灯火「なんでも神々の最終兵器が眠っているらしいよココ」

桜「ねえ、開けるのやめない!？」

灯火「入ったのがバレると一発牢屋行きの祭具殿……」

桜「えっそうなの?」

灯火「桜も同罪だよっ」

桜「灯火いいいい」

灯火「開けても引き返しても一緒でしょ」

桜「引き返しても一緒なら……引き返そうよっ」

灯火「だーめ、天空神社の巫女たる灯火が申し付ける、開け禁忌の扉」

扉が音もなく左右に開く

灯火「おおっこれが伝承にある声認証自動ドア！！」

伝承は本当だったんだ、凄く凄すぎる！！」

桜「えっ、いやああああああああ」

急に叫びだした桜をなだめながら、私もドアの中を覗き込む。

(鎖で拘束されているセラ、封印のお札的なモノが沢山張ってある)

女の子！？

灯火「ねえ、あなた生きてるの！？」

私は反射的にお札を剥がし鎖を緩めようとするが……鎖はびくともしない。

桜「だから、止めようって言ったのに……」

灯火「いやっコレ幽霊的な者じゃないと思うよ。」

あ、そういえば伝承にある「ばすわーど」が必要なのかな？」

桜はブルブル震えて後ずさる。

桜「ねえ……灯火、やっぱり帰ろう……」

灯火「だーめ、嫌なら一人で帰りなさいよ」

桜「灯火の意地悪……」

我が家に代々伝わる秘伝書……

『はじめてでも解るドウルガーの使い方』……なにになに？

灯火「ばすわーどは……『我を助けよ、翼よ、よみがえれ』」

突然拘束された少女の体に芯が生まれる

一枚絵…鎖を引きちぎるセラ

セラ「こんにちは。初めましてでしたっけ？」

あっけにと取られている私達をよそに自己紹介を始めた。

セラ「私はドウルガーのセラです……多分そうだと思います」

セラ「自信はありませんが……そんな気がします!？」

セラ「あつてますか？」

灯火「ダメだ、こいつ……寝ぼけてやがる……」

セラ「自覚はありませんが、そうなんですか？」

灯火「それとも壊れてるのかな？」

灯火「ねえ、あなた……神々の最終兵器なんだよね？」

セラ「はあ？」

灯火「いや、だから強いんでしょ!？」

セラ「いえ……私は偵察機だったと思いますよ、自信は無いですけど……」

灯火「偵察機か……ハズレだなこりや……」

セラ「えーそうなんですか、残念ですねっ」

桜「灯火ちゃん、そんな事言ったらセラちゃんが可哀そうだよっ!!」

桜「偵察は最も重要なファクター、強制偵察部隊こそ軍団の花形っ!!」

あ、桜のやヴあいスイッチ入った……わが身が危険すぎるから謝ろう。

灯火「ごめんごめん、私は灯火、こっちのめんどくさい子が桜」

セラ「灯火、桜……良いお名前ですね」

セラ「仲良くしてくださいね」

8

13 西暦2265年

さて、新入りが挨拶を始めて早五分……

ふるふる震えたまま一言も話さない。

まあ、俺たちは筋金入りのダメ人間の集まり、こういう奴も偶にいる。

明弘「まあ、そんなに緊張しなくてもいいぜ。

俺たちもお前と同じようなもんだから」

言ってて悲しくなる。

咲夜「私まで一緒にするなつ、ねえアンタ名前くらい名乗りなさいよ」

咲夜「死ぬまでは覚えておいてあげるからっ」

???「ぼっ……ぼくは………」

???「空(そら)」

咲夜「空……いい名前じゃない、天罰機で空から降って来る

クソと戦うにはピッタリの名前ね」

夜が嫌味全開で空をイジる。

空「えっ……あつ……ありがとう……そんな事言われたの………」

はじめて……だから………」

空が顔を真っ赤にした……天然かっ!?

咲夜「ちよっ……別に……善意で言った訳じゃないんだからねっ、

勘違いしないでよねっ!」

咲夜は耳まで真っ赤に染めている。

セラ「ふふふつ、相性良いみたいですね二人ともっ。」
やれやれ。先が思いやられる……

4

14 西暦3276年

灯火「ねえ、本当に覚えてないの？」

セラ「えーつと……なんでしたっけ？」

私たちは神社の社殿でセラを尋問している。

灯火「だから、偵察機でも戦えるんですよ!？」

セラ「戦う事は……出来たと思いますが……たぶん。」

灯火「だめだ、こりゃ……」

セラ「すみません……」

灯火「でも、偵察機って事は……空は飛べるんだよね？」

セラ「さあ、飛べたような飛べなかったような……」

次の瞬間、唐突に耳をつんざくような爆発音がした。

桜「灯火……いやああああ、助けてっ！」

灯火「桜っ大丈夫、社殿の中にいれば安全だから大丈夫」

桜は私の腕の中でガタガタと震えている。

また村にミサイルが着弾したか……

この村だけじゃなく、世界には時々ミサイルが降って来る。

しかし何故か不思議な事に……この神社にはミサイルが落ちない

すくなくとも落ちたことが無い。

一度ミサイルが降り注ぐと決まって何発か落ちる。

村人たちがミサイルを避けるために駆け込んでくる。

セラ「……………」

(セラ目の色が変わる)

灯火「セラ……あれ迎撃出来る？」

セラ「空……………」

灯火「えっ？」

急にセラの翼が開き、物凄い風圧と共に外へ飛び出して行った。

やっぱり伝承は本当だったんだっ。

私は外へ飛び出した。

セラが天を見つめて立ち尽くしている。

灯火「ねえ、セラっ！」

セラ「フアランクス……起動……」

今までとは別人のようなセラ

セラ「飛翔体接近……ロックオン……」

セラ「フレア起動……ドックファイトモード……」

セラの体から物凄い勢いで風が生まれる。

セラ「テイク……オフ」

セラは天空高く飛び上が……りはせず……

少し浮いた状態でぐるぐる回り思いつきり地面に突き刺さる。

灯火「やっぱり壊れてたあああああ」

セラ「フアランクス……装備してませんでした……」

セラにミサイルが突き刺ささり大爆発を起こした。

セラ「私、故障中のようにです。自信は無いですが……」

あ、生きてた……頑丈だな……

灯火「ダメだこの最終兵器……」

天罰機、アスラを狩る為だけに作られた半生体機械

セラは苦手だがコイツは最高にイカしたマシンだ。

スピードとスリル、アスラを撃破した時の高揚感。

俺は戦闘が好きだし得意だ。

得意じゃなきゃ生き残ってこれなかったからな……

戦闘時のコックピットは中継され、奴らにも届いている。

恨みつらみを言うのもムカつくので、

最高の気分でアスラを狩る姿を見せつけてやる事になっている。

天罰機トリプラ、こいつが俺の愛機、共に二年戦い抜いて生き残った相棒だ。

今日は訓練飛行、アスラとの戦闘も想定されてはいない。

咲夜「ちよつと明弘、もう少し抑えなさいよっ」

咲夜の天罰機『パールヴァアティ』が後ろから付いてくる。

明弘「咲夜っ、せっかくだから楽しもうぜ。」

さらに速度を上げる。

左右に蛇行しながら山々を超え、パールヴァアティを完全に引き離れた。

趣味で速度重視にチューンしたトリプラ、

重武装なパールヴァアティじゃ勝負にもならないか……

セラ「オーバースピード、安全速度違反ですよ明弘っ」

ち、口うるさい奴が来やがった。

残念なことに偵察機であるドウルガーは俺のトリプラ並みのスピードが出せ

る。

明弘「セラっ今日こそトリプラ最強伝説を作ってやるぜ！！」

今日こそドウルガーをチギってやるぜ！！

俺は左右にエアドリフトをキメ、セラを徐々に引き離す。

まったく俺のトリプラは最高だぜ。

何かが突然目の前を横切る、数秒遅れて爆音がトリプラのユクピットに響く。

何者かに追い抜かれた風圧だ。

大きさからしてセラじゃない……

あれは天罰機？

天罰機バイラヴィ？

空の機体？

明弘「おい、おまえ空か？」

空「あ、う……わあああああああ」

明弘「何やってんだ？今日が初めてなんだろ？」

今日くらい安全運転しとけよ……」

空「たっ……た……すけ……て……」

バイラヴィはそんなに速い機体だったか？

セラ 「明弘、バイラヴィを止めて下さい。あの子は我を忘れてますっ。」

明弘 「全力で暴走する天罰機をどうやって止めろっていうんだよっ」

セラ 「おもいっきりぶつけて下さい、そしたら正気を取り戻します。」

明弘 「くそっ、俺のトリプラが傷ついちまうぜ！セラ、直すの手伝えよっ」

俺は呪いの言葉を1ダースをほど吐き、

トリプラを迷走するバイラヴィにガンガン何度もぶつけた。

バイラヴィはバランスを崩し、地上に思いっきり突き刺さった。

アスラと戦う為に作られた天罰機はこの程度では

壊れないが中身は無事だろうか？

まったく、手にかかる面倒な奴と組むはめになって……………最悪だぜ。

9

16 西暦3276年

ミサイルの雨は一通り降り注いだ後、突然やんだ。

セラ 「弾切れみたいですね…………」

灯火 「えっ？セラ…………ひよっとしてミサイルが来るのが解るの？」

セラ「はあ……偵察機ですから……解るのかもしれませんが。
自信は無いですけど……」

灯火「ポンコツめ……」

セラ「すみません。」

桜「でもミサイルが降って来るのが予め解れば……」

灯火「っでも、さつき着弾するまで反応しなかったような……」

セラ「故障中ですかね？自信は無いですけど……」

灯火「ダメだ、この子使えない……」

セラ「あ……でもトレーダーありますよ」

灯火「えっどこに？」

セラ「多分……この神社の地下に……あるはずですよ。」

自信は無いですけど……」

灯火「ほんとに？」

セラ「天罰機があるから……ミサイルが落ちないだと思えます。たぶん。」

灯火「天罰機？」

セラ「最強の天罰機……バイラヴィ……」

あの子は凄い戦闘機だったような……それでも無かったような……」

灯火「ほほう、それ……ミサイル落とせる？」

セラ「対人兵器のミサイルくらいなら簡単に落とせますよ。

そんな気がします……」

灯火「おおつ、それはいいね。探しに行こうよ天罰機」

桜「えーっと私は用事があるので……」

灯火「私はマッピングするから桜はランタン、セラは道案内よろしくねっ」

桜「そんなー」

トリプラは先頭を走る。

前のリーダーは一番後ろで小隊を指揮していたが、俺には性に合わない。

セラ「明弘っ飛ばし過ぎですよ」

明弘「ふんっ、咲夜、空、ついてきてるか？」

咲夜「あたりまえでしょ、誰に物言ってるの？」

空「ううああああああああ」

空の絶叫が聞こえたが、まあ何とか付いて来ているようだ。

ただ単に暴走して真っすぐ飛行してるだけかもしれないけど。

明弘「これから月の重力圏内だ、気をつけろっ」

月の表面が見えて来た、天罰機の無かった時代の巨大な戦艦が多数、

横たわっている。

歴史の授業で習った年表も月での戦いの歴史ばかり。

たしかあれは……第13次アルタモノフ界戦で沈んだ戦艦だったか……

毎日毎日戦つてりゃ月がゴミで溢れかえるのも理解できる。

月の地平線が一瞬光り輝き、歌が聞こえて来る。

美しい声……少女のような澄んだ歌声。

真空の宇宙空間で歌とは非常識な連中だ。

明弘「くるぞっ！咲夜、援護頼む。」

咲夜「おまかせっ」

明弘「セラっ、バイラヴィを何とか守れ！」

セラ「はい、明弘っ……気を付けて……………」

視線の先に金色色の塊が見えた。

神々しく光り輝く姿……あまりにも美しすぎる人類の天敵……………アスラ

「苦しみに祝福を……………」

「憎しみに終止符を……………」

「その魂に安らぎを……………」

まるで仏や神々のような姿……人類に対するイヤミだろうか？

セラ「観世音（かんぜおん）タイプB、数10」

美しい姿と美しい歌声に一瞬、見とれた。

何度見ても奴らは美しい。

明弘「咲夜っ、対神誘導弾！」

咲夜「言われなくても解ってるって。対神誘導弾全弾発射、

いっけえええええ」

パールヴァティから無数の対神誘導弾が発射され、

観世音タイプBに吸い込まれる。

セラ「観世音タイプB、8体の撃破を確認」

21

明弘「あと2匹かっ……オーバーブースト、セラ、排気に巻き込まれるなっ」

セラ「はいっ」

30秒限定のオーバーブースト……重力制御シートでも、
体が押し付けられ息が出来ない。星が線のように伸びる。

光速の100分の1の速度、こればかりは宇宙空間でしか味わえない。
観世音タイプBが爆炎の中から現れる。

明弘「もらった！」

トリプラのレーザートマホークが観世音タイプBを切り裂いた。

セラ「明弘っ上ですっ」

明弘「わかってるぜ、くたばれっ」

機体を一気に垂直に立てなおし、最後の一体に超接近状態で一撃を加える。

観世音タイプBのどてっばらに風穴が開いた。

しかし、観世音タイプBの腕がトリプラに届いた。

機体が揺れる。

くそっ近すぎたか？

「もう……いいんだよ……そんなに……苦しまないで……」

明弘「だまれクソがああああああ」

近接用機関銃フアランクスを連射する。

観世音タイプBの体が引きちぎられる。

接近しないと使えないがフアランクスの威力は本物だ、

神切り包丁のあだ名はダテじゃない。

粉々になった観世音タイプBの残骸を旋回で吹き飛ばす。

オーバーブーストが切れる。

明弘「見てるかっクソども、俺は今日も生きてるぞおおおっ」

俺はいつものようにカメラに向かって咆哮した。

8

18 西暦3276年

セラ「バイラヴィ、お久しぶりですねー、少し痩せました？」

灯火「ええええっセラ、コレと話が出るの？」

セラ「ええ、バイラヴィは照れ屋さんですけど、

本当はいい子なんですよー、たぶん。」

灯火「はははは……ほんとかなあ？」

桜「フアランクスっこれがフアランクスっ、はあはあ……、これ……まさかレ
ーザー光線とか出る穴っ！？」

桜「後ろの穴っこれ、ジェットですか？後方排気ですか？ターボですか
っ……！」

桜「しゃっしゃっえ、たまりません！この艶めかしい曲線美」

桜はバイラヴィを一目見てから、いつもの桜だ。

灯火「えーこれは……セラみたいに勝手にわしゃわしゃ動く物？」

セラ「ええーっと、何でしたっけ？何かが入ると動いたような……」

桜「何か？何かとは何ですか！？燃料ですか？

液体ですか？固形な何かですか！？」

スイッチONの桜はこんなモンだ。

セラ「桜があんまりジロジロ見るからバイラヴィは照れているのですよー、
きつと。」

桜「ところで、フアランクスっ……セラさんのフアランクスが出る穴は

どこですか、前ですか後ろですか？まさか口からですかっ？

まさか……目からですか？」

私は桜の首筋に手刀を叩き込んで場を落ち着かせる。

灯火「え〜つまり動くのに必要な物があれば動くって事？」

セラ「はいー、あーでも、ここにありませんよ……二つ」

灯火「どこ？どこに？そもそも必要な物って何？」

セラ「えーっと……アレですアレアレ。なんて言いましたか……」

灯火「ほら、さっさと思い出して」

私はセラの頭を斜め45度からちヨップし続ける。

セラ「あ…思い出しましたー」

おおっ古代より伝わる伝統的な機械の修理方法は今でも有効かつ！？

セラ「バイラヴィが動くのに必要な物……それは」

セラの顔が急に引きしまる。

セラ「人間の命です。」

明弘「おーい、生きてるか空」

空「はあっはあっ…おっおえええ…」

明弘「何もしてない奴が一番戦った感があるな…」

セラ「相変わらずお見事です。明弘も咲夜も…」

さすがうちの基地のエースですね。」

明弘「はっはっは…『人類の』エースと呼んでくれっ」

咲夜「セラ、明弘をあんまりほめ過ぎない、調子に乗って無茶するから。」

明弘「調子に乗った時のオレ様がどれほど最強か知ってるだろ？」

咲夜「ふん、まあアンタが落ち込んでる姿なんか想像も出来ないケドね。」

こうして咲夜と軽口を叩いている時、なんかイイ。

セラ「本部…敵小隊…殲滅完了…任務成功です。」

帰投許可を……はい。了解です。」

セラ「帰投許可が出ました。作成終了です。」

明弘「さて、レトリバー小隊。これより帰投する。オーバー？」

26

前のリーダーのセリフそのまま、帰投を告げる。

トリプラの機首を反転させ地球に向ける。

丸い地球、青く揺らめく惑星。

こうしてみると地球も悪く無いな

まあ、住んでる奴の99.99%は戦いもせず生きてるビチグソ野郎どもだ

けどな。

「君は……」

アスラ！？

どこだ？

セラ「月軌道上に新たなアスラ確認、今の処1体です。」

「憎まれもせず……」

しかし、任務は終わった。

ほっといて逃げ帰れば問題無いだろう、後は他の隊がドンパチやってくれる。

「記憶にもこらず……」

そもそもパールヴァティの対神誘導弾も打ち尽くした。

トリプラのオーバーブーストも使い切った。

レーザートマホークやフランクスだけでゴリゴリ戦うのは趣味じゃない

「友達と遊んでた……」

「本当は一人で空を見ていたのに……」

なんだ？

今日のアスラの歌は少し違う。

「好きな人とペアを組んで……」

「君を好きな人なんか……」

「この世界に存在しないのに……」

あーもう、なんだこのメンタルに来る歌は？

「今日も役にたたない……」

人類に嫌がらせをする為に生まれたアスラの歌……

いつもは……もつと抽象的な内容なんだが……今日は変だぞ？

「なんで好きになったの……」

「君は一番好きな人に……一番迷惑な事……したよね……」

「君に好きになられるなんて……一番最悪……」

「本当に可愛そうなあの子……」

咲夜「何？この歌？」

明弘「新しい精神攻撃か？」

咲夜「新しい……いやがらせ……でしょっ……鬱になるわ……」

明弘「まあいいやつ……全機戦闘船速。地球に帰るぞ」

「死んで良かった……」

「君に好きでいられるより良いよ……」

空「うわああああああああ」

セラ「ちよっちよっと空、何を……帰投許可が出ているのですよっ」

バイラヴィが反転する。

明弘「おい、空っ!?!」

咲夜「何やってんのよ!?地球に帰れるのよっ!しっかりしなさい!!」

「逃げるんだね今日も……」

「お葬式にも行かなかった……」

「でも君に来られるより、幸せだったよ……」

突然爆音が響き、トリプラが揺れる。

これはバイラヴィのオーバーブースト?

明弘「何やってんだ空っ戻って来い!!」

トリプラはオーバーブーストを使い切っているので追いかけるようがない。

セラ「空っ空……ダメです。止まって、戻って来て下さい。」

「全員が賛成……」

「君が一番知らない……」

トリプラを旋回させると、巨大なアスラが望遠モニターに映った。

黄金に輝く少女、四枚の羽根……まるで天使のような姿……

ヤバイ、あいつ!前のリーダーと小隊の半数を削った奴と同タイプ……

セラ「セラフイムε（イプシロン）！ダメです。

一機で戦える相手では無いのですっ！空、止まって……！」

咲夜「まったく、なにやってんのっ、本当に迷惑な奴……」
トリプスが再び揺れる。

オーバーブースト？

パールヴァティかっ？

明弘「まてっ咲夜、止まれっ！」

咲夜「あのアホ連れ戻して離脱するからっ」

明弘「やめろ咲夜っ危険すぎる、戻って来い！」

バイラヴィとパールヴァティが遠ざかって行った。

セラ「空っ…咲夜あああああ……」

星来「先輩？あすみ先輩ですよ？」

あすみ「久しぶりね星来。でも今の私は天帝。転生したのよ。」

星来「天帝……でもどうしたんですか？そんなに

金ぴかになっちゃって……」

星来「卒業してから色々あったんですか先輩？」

あすみ「うん。まあね。」

星来「大人の階段昇ったんですね……」

それ以上の階段を昇っちゃった感じですが……」

あすみ「星来は相変わらず面白いわね」

星来「先輩こそ……金ぴかで丸いわつか付いてて……」

なんだかアスラみたいですね……」

あすみ「そう、私はアスラの帝（みかど）」

星来「えっ？」

私はあまりの事に辺りを見回す。

同じく金色の少年……あれは……ルシフェル？

6体のルシフェルが跪いている。

星来「ルシフェル!？」

天帝「そう、貴方は6体、私は5体、競って狩ったよね。

結局勝てなかったね。」

星来「なっなんで……」

天帝「今の私はアスラの帝、これらは手下達。今の貴方の同僚ですよ。」

星来「えっ……？同僚？」

天帝「私と貴方が狩り過ぎて6体しか居なくなっていました。」

天帝「彼らはレアで、稀にしか生まれないのに……」

星来「アスラ……こいつら……許せない奴らなんですよ。先輩……」

天帝「気持ちは解ります。仲間が何人この者どもに殺されたか……」

星来「先輩、そもそも……何でアスラがイズモにいるんですか？」

天帝「サンサーラの風が貴方には吹いています。」

星来「サンサーラ？」

天帝「最も不幸な魂は、時としては極限へと至る……」

天帝「貴方は選ばれた不幸な魂、そして生き延びた最も高尚な魂。」

天帝「そう、貴方には全てを知る資格があります。」

サンサーラの……この世界の真実を……」

星来「真実……」

咲夜「ねえ、天帝……アンタ達何がしたいの？」

咲夜「人類を皆殺しにして、何か良いことあるの？」

天帝「苦しみ、悲しみ、全てから救ってあげたい……」

咲夜「はあ？」

天帝「守ってあげたい……」

咲夜「何を言ってるの？」

天帝「もう、苦しまないで良いのです。」

天帝「セラ……」

セラ「はい？」

天帝「セラ……どうしたのですか？」

セラ「えっ？誰でしたっけ？」

天帝「悲しみ苦しみに耐えきれず……」

記憶破壊を起こしたのですね。かわいそうに……」

空「バイラヴィ……怯えるな……震えを止めろ。」

天帝「……………!？」

天帝「空……貴方の活躍は熊耳（くまがみ）より聞いております。」

天帝「最も不幸な魂は、時としては極限へと至る……そうでしたねセラ」

セラ「そうでしたっけ？自信は無いですが……そんなような気がします。」

空「僕が……不幸？」

天帝 「貴方は自分の子供をクシャトリアにしたくない親に
買われ転校したと記録にはありました。」

天帝 「育児放棄された挙句……母親に売られた子……それが貴方ですね、空」

咲夜 「空………」

未希（みき） 「この方は人罰機カーリー。人を裁く最強の存在」

空 「君は確か……牢屋で会った……」

未希 「クシャトリアは全て滅ぼす。アスラはもう用済み。」

空 「なぜ……」

未希 「クシャトリアに成った時思った……私は必ず生き残るんだって……」

未希 「あの変態の玩具になっても……必ず……」

空 「奴らを倒せば君も人間に戻れるんだよ……」

未希 「嘘だっ。」

未希 「お前たちだって勝てば私を……」

未希 「それにクシャトリアを全て倒せば卒業させてくれる」

未希 「今度は私が全てを支配してやるんだっ。」

空 「君は……それでも……運命に……抗う……」

空の口から美しい歌が発せられる。

空「本等は……誰よりも……世界を……愛してるのに……」

未希「だまれっ」

カーリーから光の束が放たれる。

バイラヴィの手前で光の束が捻じ曲がる。

推力を失ったバイラヴィは地上へと落下する。

未希「お前……」

空「君は……本当に……うつくしいね……」

空に付き従うルシフェルZの光の矢、カーリーを傷つける。

未希「くっ……天帝……セラ……こんな……こんな……」

セラ「カーリーはクシャトリアを狩る為に生まれた機体。」

空「そうだね、天帝やアスラと戦う事は想定されてない。」

未希「まだっ、私はまだ負けられない。」

空「カーリーを捨てて……地球に帰りなよ……君はまだ引き返せる……
僕と違って……」

未希「黙れっ黙れっ黙れっ……私は……私は勝って……」

未希「勝って帰るんだっ、パパとママの処にっ」

空「君は……べつに負けたわけじゃ……帰りなよ地球へ……」

未希「パパとママは勝ち組しか愛さないっ。妹みたいなっ。」

空「……………」

未希「天帝……オマエには……オマエには負けない。」

空「もう……やめようよ……」

傷を……かばい……生きる……そんな……

姿は……みに……くいね。

宙域に美しい歌が響く

空「えっ？何これは……」

宇宙に一筋の光が走る。

空「アスラ……ルシフェル……生きていたんだね……」
ポロボロに傷付いたルシフェルがカーリーに衝突する。

空「明弘……帰って来たんだね……」

セラ「あきひろ……誰でしたっけ？」

空「……セラ、君は地球に帰るんだ。」

セラ「えっ？」

空はセラを蹴り飛ばした。

セラは地球の重力に引かれ落下する。

セラ「たいちよーひどいですよー」

空「セラ、バイラヴィをよろしく。」

カーリーはルシフェルを取り込んだ。

空「まいったな……これじゃあ手が出せない。」

空「天帝ですらアスラを殺せない設定だったね……」

未希「そうだ、思い出せアスラの王達よ。

蔑まれた日々。お前たちを選んだ者達のにやけた表情を！！」

未希「サンサーラシステム維持に回った科学者達…勝ち残った者達……」

未希「あの戦いの後……月へ逃れた……」

そしてお前を倒す方法を考え続けた。」

未希「カーリーに乗った時点で、あすみ様の因子、

春香と同化した事により不老ではあったが……

オマエがいる限り安心は出来なかった。」

未希「そして、1000年以上かけて作り出された天帝を殺す為の機体

『神罰機』シヴァ」

未希「お前を倒して私は天帝になる。そしてサンサーラシステムを再建する」

空「バカなっ……僕らを苦しませ続けたサンサーラを何故君がっ……」

未希「私が帝、王達を従え、世界を従え、輪廻を超える。

私こそがサンサーラ」